

関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.11

2007.10

目次

学院史資料室写真集10	1
関東学院史料展 展示史料の紹介	2
学院史資料の紹介	11
資料・情報提供のお願い	12
編集後記	12



学院史資料室写真集10・戦災にあった建物 ～テンネー記念講堂～

関東学院設立者テンネーを記念し、テンネー記念講堂を建てた。創立20周年記念事業として1939（昭和14）年3月に完成し、11月に記念式典を行った。収容人数2000人で当時の横浜一の大講堂であった。当初鉄筋コンクリートで建設する予定であったが、日米関係が悪化して、アメリカでの募金を見込めず、経費を半分にして木造に変更した。1945（昭和20）年5月29日の横浜大空襲で全焼した。

テンネーは1900（明治33）年来日、日本バプテスト神学校校長、東京学院長を歴任、1919（大正8）年に中学関東学院を設立。1927（昭和2）年には財団法人関東学院が組織され学院長として学院の基礎を築いたが、過労が重なり1930（昭和5）年帰国、1936（昭和11）年1月11日召天。

テンネーは関東学院設立の趣旨を「1. 日本の学校とすること、2. 充分なる教育機関とすること、3. 人格の形成に重点を置くことである。アメリカ人が、このために寄付したのは、世界人類みな同胞兄弟であるという観念からで、これは、アメリカ人が日本人の友だちであるというしるしである。」と述べている。

（参考資料：『この丘に立つて』、『関東学院学報』第20号）

関東学院史料展(第3回)

展示史料の紹介

「第3回 戦時下の関東学院—試練と建学の精神—」
2007年7月4日から7月25日まで開催
於：関東学院大学 Foresight21エントランスロビー

◆展示写真



陸軍病院での勤労作業

1938(昭和13)年6月、「集団的勤労作業運動実施ニ関スル件」が通牒されて、中学校以上の学生・生徒の集団的勤労作業が実施された。

関東学院の中学生は相模原の臨時東京第三陸軍病院(現独立法人相模原病院)に入院している兵士を慰めるために花壇造成の勤労作業を行った。

病院は1938(昭和13)年4月に開院し、勤労作業はその年の10月末に行われ、生徒は引率の教員と一緒に切り株の掘り起しから始めた。作業人員は延べ146名で、6日間で完成させ、坂田院長が「三春園」と命名した。(1)*

*11頁参考資料一覧の番号。以下同様。



関東学院三崎寄宿舍

1928(昭和3)年7月、三浦半島の三崎町諸磯海岸に夏の研修施設として50人収容できる「関東学院三崎寄宿舍」を建設した。その後施設を拡張し、キリスト教団体やキリスト教系の学校などの研修にも広く使われるようになった。夏季に臨海学校を開き、午前は朝の礼拝から始まり、食事、勉強、午後は自由行動で海水浴やハイキングに興じ、夕拝で一日が終わった。

生徒たちは、坂田院長は学校では厳しい顔つきで近づき難いと思っていたが、三崎寄宿舍での共同生活では、生徒が脱ぎ捨てた靴など整頓する等坂田院長の優しさを実感した。また、教員との楽しい交流の場でもあり、戦時下の暗い世相にあって、楽しい思い出の場所となった。

その後「三崎報国寮」と名称を変え、軍事教練が行われるようになったが、1944(昭和19)年4月には海軍による強制買い上げで手放すことになった。(2・3)



三崎寄宿舍での野外教練

中学部の野外教練は三崎寄宿舍でも行われていた。1940(昭和15)年6月末に4泊5日の日程で行った記録が残っている。1日目は7時半に三春台の校庭に集合、黄金町駅から浦賀駅まで電車に乗り、浦賀駅から三浦半島の先端にある三崎寄宿舍まで行軍した。2日目から、5時半に起床、国旗掲揚、朝礼を行い、午前は教練、午後は勤労作業と水泳を行った。また、夜間教練も2日間行った。

「戦闘教練」、「陣中勤務」、「夜間教練」と学校内では比較的困難な科目に重点を置いた。また、勤労奉仕として運動場、水泳場の整理、道路修繕作業等を行った。

「三崎廠営ノ目的」の一つに「盡忠報国ノ信念確立、大自然ノ中ニ宗教的情操ノ涵養(毎日朝礼、夕礼ヲ行ヒ訓話ヲナス)」とあり、教練期間も礼拝を守っていたことが窺える。(2・4)



富士山麓での野外教練

1925（大正14）年4月、「陸軍現役将校配属令」が公布された。7月から中学部に将校が配属され、軍事教練が始まった。

1940（昭和15）年5月、中学部は御殿場滝河原での野外教練を3泊4日の日程で行った。午前8時に三春台を出発、黄金町駅から横浜駅経由で御殿場駅へ行き、そこから滝河原まで行軍した。「部隊戦闘教練」、「陣中勤務」、「夜間教練」等戦闘のための実践的な教練に重点を置いた。5時半の起床から22時30分の就寝まで一日中行われた。

高等商業部は将校の配属の申請を遅らせ、1937（昭和12）年9月に将校が配属され、翌月には野外教練を富士山の裾野で行った。（4・5・14）



戦時下の院長 坂田 祐

坂田祐は26歳で日露戦争に従軍し、37歳で東京大学を卒業。日露戦争での戦功により勲章を授与されたが、大学最後の口述試験では試験官の教授に対して非戦論を主張して譲らなかった。

戦時下の院長として、建学の精神であるキリスト教主義を守るため横浜内のキリスト教主義の学校指導者と団結して、キリスト教主義を削除せよという県当局と会見し、力強く建学の精神を守り抜いた。

また、横浜大空襲では中学本館を火災から守るために、自ら顔面にやけどを負いながら、生徒を指揮して消火活動にあたり中学本館を火災から守り抜いた。

元東大総長で信仰の友である南原繁は坂田の著書『恩寵の生涯』の序文の中で「太平洋戦争中、著者が軍の圧迫に抗して、あらゆる干渉から、学院を守り抜いたことは、記憶されている。」と評価している。（7）



戦争前の三春台キャンパス 1935（昭和10）年頃

写真左側の建物は1927（昭和2）年9月に建てた地上2階、地下1階の高等商業部の本校舎で、その周辺には木造校舎が建ち並んでいる。写真右側の建物は1929（昭和4）年に建てた中学本館。

1923（大正12）年9月1日の関東大震災で壊滅的な被害が出たが、1934（昭和9）年には震災復興工事をほぼ完了した。高等商業部の本校舎と中学本館は横浜山手の旧ベリック邸や旧ラフィン邸の設計者で知られるモーガンの設計による。

横浜大空襲の焼夷弾による爆撃で木造校舎は全滅した。高等商業部の本校舎の内部は焼夷弾の直撃にあったが外部は焼け残った。そして中学本館は坂田を先頭に教職員、生徒の必死の消火活動によって守られ、現在に至る。（8・9）



学院での礼拝

戦時下、国家体制に反するという理由でキリスト教主義学校に対する圧力が強まり、礼拝を中止した学校や教会堂を閉鎖した学校もあった。

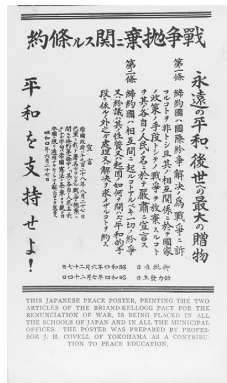
戦前の高等商業部卒業生が、「関東学院は最後まで礼拝をやっていました。」「戦争になってから非常な圧力が加わりましたが、坂田先生が毅然としてキリスト教主義を引っ込めませんでした。」と証言している。『教務日誌』にも終戦まで礼拝を守ったことが記されている。

学校行事も礼拝形式で行っていたが「宮城遙拝」や「(教育) 勅語奉読」が加えられていった。

当時の院長坂田祐は著書『恩寵の生涯』の中で、「宮城遙拝も強要された。毎日、朝礼の際これを実行した。すべての集会は、宮城遙拝を以て始められた。神社参拝も強要された。」とキリスト教主義の教育を守ることの困難さを述べている。(10・12・17)



コベル (J.H.Covell 1894~1943)



コベルは1919 (大正8) 年宣教師として来日し、太平洋戦争開始直前の1939 (昭和14) 年に日本から強制退去を命じられフィリピンに転任するまでの20年間、関東学院で教育に携わった。1943 (昭和18) 年、転任先のフィリピンで日本軍によって夫人と共に惨殺された。

1925 (大正14) 年に「陸軍現役将校学校配属令」が制定され、学院に将校が配属され軍事教練が行われた。軍事教練の査閲の日に、学院にとって建学の精神に反する悲しむべき日として、コベルは喪章を付け、黒ネクタイを着用し抵抗の姿勢を表した。

コベルは絶対平和主義者で国際連盟の憲章に「永遠の平和、後世への最大の贈り物 平和を支持せよ」と書き加え学院の廊下に貼り、平和を訴えた。また、手紙を出すときには、封筒の表に「軍艦ではなく友愛を」と英文で書かれたスタンプを捺し、平和を訴えていた。(2・13)

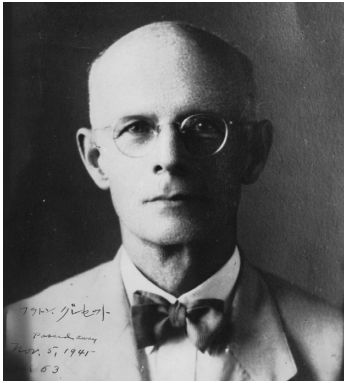


関東学院セツルメント

高等学部社会事業科は関東学院設立の主旨である「奉仕せよ」を実践するため、セツルメント活動を行った。指導者は渡部一高教授で、1928 (昭和3) 年から三春台近くの貧しい人々が集団で住む地域に一戸を借りて行っていたが、この地域が不良住宅地域に指定され、神奈川県浦島町に活動の場を移した。全国に呼びかけた募金により、1931 (昭和6) 年、150坪程の土地と木造平屋の会館を開設した。その後軍国主義が色濃くなり、セツルメントに関わっていた学生たちが逮捕されたこともあり、1937 (昭和12) 年3月に閉鎖された。

活動内容は、生活についての相談、子どもたちの遊びと学習の指導、労働者の意識向上のための労働学校等で、夏には子どもたちのために1週間のキャンプを行った。

写真はコベルが校長をしていた日曜学校の礼拝での祈りの場面である。コベルはキャンプの責任者としても活動した。(9・14・16)



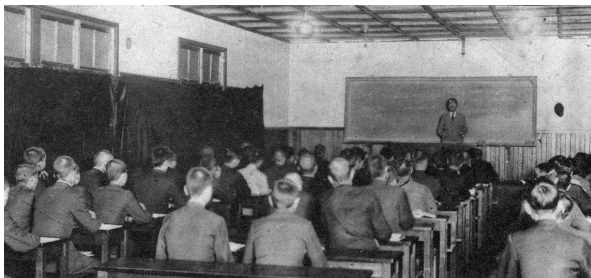
グレスセット (J.F.Gressitt 1883~1945)

1907(明治40)年来日。横浜バプテスト神学校教授、東京学院長、中学関東学院設立時の理事を務め、英語と聖書を教える。

日本を愛し、日本を永住の地と定め、太平洋戦争の際、本国アメリカからの引き揚げ船による帰国命令を退け、家族と別れてひとり日本に留まる。その後、東京抑留所に収容されて極度の栄養失調になる。終戦間もない1945(昭和20)年11月5日、治療を受けるため帰国することになったが機のタラップに足をかけた途端に倒れ、病院に運ばれたが召天した。

日米両国の戦争を避けるための熱心な祈りが記されている日記が『愛と祈り』と題し戦後出版された。

「おお、父よ、人々に戦争を終わらせる道を見出す方法を教えてください。今、権力の座にある人々に、停戦に向かって努力するように、平和を打ち建てる道を学ぶよう助けてください。われらの父よ、あらゆる所にある学校の指導者を助けて、すべての生徒に正しい平和を求めるように、教えさせてください。」1942(昭和17)年1月1日の日記より(2・13)



灯火管制の下での英語学校の授業

1937(昭和12)年に施行された「防空法」により空襲に際して民間人や自治体がおこなう任務に「灯火管制」があり、夜間の灯火が空襲の目標になることを防ぐため、不急不要の灯火は消灯または撤去すると共に家庭や公共施設の事務所では、電灯に黒布をおおい、窓や出入り口の採光部に暗幕を貼ったりした。

夜間授業を行っていた英語学校は教室の窓に暗幕を張り、授業を行っていた。関東学院英語学校は1924(大正13)年に設立され、横浜で高い評価を得て多くの卒業生を出していた。しかし、英語は敵国語ということもあり生徒も減り、1943(昭和18)年3月に授業を停止し、12月に解散式を行った。(8・9)



横浜大空襲

1945(昭和20)年5月29日午前9時20分頃から10時半頃までの間に、アメリカ軍のB29爆撃機517機、P51戦闘機101機が横浜上空に來襲。無差別焼夷爆弾とP51による銃爆撃により、横浜は壊滅的な被害にあい、旧横浜市全域のほとんどが焼失した。

1時間余りの攻撃で、投下された焼夷弾は総数43万8,576個(2,569.6トン)と大量で、しかも木造家屋を焼き払うのに適した収束焼夷弾攻撃により、市街地を猛火に包んだ。市街地の大半が壊滅し、市民の半数近くが罹災し、廢墟の街と化してしまっ。被害者は罹災者311,218人、死亡者3,650人、重軽傷者10,198人、行方不明者309人を出した。この空襲で関東学院の施設の4分の3が失われ、姉妹校の捜真女学校は全焼した。(2・9・18)



横浜大空襲黄金町付近の惨事

横浜大空襲で「一番の人身の被害は京浜急行線黄金町駅が中心であった。」と『大空襲5月29日』（有隣堂）に記述されているが、駅の構内には文字通り焼死体の山で、ここから関東学院に向かう道に多くの焼死体が横たわっていた。建物も爆撃による猛火で焼け落ち、焦土となり悲惨な光景が続いていた。

被災者は関東学院に避難してきて、焼け残った中学本館は被災者で一杯になり、学院の大防空待避壕も人で埋まり、それでも入りきれなかった人たちの多くは校庭や丘の植え込みの間に横たわっていた。避難してきた人たちのために必死の救助活動を行った。（2・9・15）



白山源三郎（1898～1985）

文部省の政策として、1944（昭和19）年4月1日高等商業部が明治学院に合併された。関東学院の中に高等教育機関を残すには、工業系学部を設置する以外になく、高等商業部長だった白山は、航空工業専門学校と工業学校の設置のために奔走し、1944（昭和19）年4月、設立にこぎつけて、初代校長になった。

終戦後、1945（昭和20）年に航空工業専門学校を工業専門学校に転換し、1946（昭和21）年には高等商業部を経済専門学校として復活させた。これらは学制改革により大学工学部、経済学部となり大学発展の基礎をつくった。

白山は1927（昭和2）年高等学部商科教授、1933（昭和8）年高等商業部長に就任し、以後、坂田祐と共に学院の指導者としてその発展に寄与した。

白山は、奉仕について「先ずもって自らある力なり、資格なりを具えて居て、それを社会のため、他人のために働かせて、これを益する所に始めて『奉仕』がある」と言い、教育の大切さを説いている。（9・13）

（戦災にあった建物 ～テンネー記念講堂～（表紙頁参照））

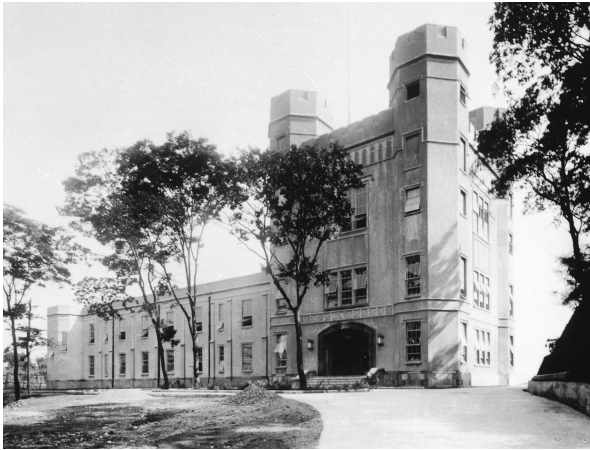


戦災にあった建物 ～高等商業部本館～

高等商業部本館は1927（昭和2）年9月にモーガンの設計により、鉄筋コンクリート2階、地下1階で竣工した。モーガンの代表的作品のひとつにあげられ「装飾を排した、誠実で安定感のあるプロポーションはモーガンならではの」と評価されていた。

横浜大空襲で屋上を貫いて落下した焼夷弾によって内部の大半が焼かれ、明治期のプロテスタント関係の貴重な文献を含む蔵書約5万冊と神学部、社会事業部、高等商業部の資料を焼失した。

この建物を戦後修復し、定時制高等学校の校舎として使用したが、2006（平成18）年8月に取り壊し、現在、同地に中学校新校舎を建築中である。（8・9）



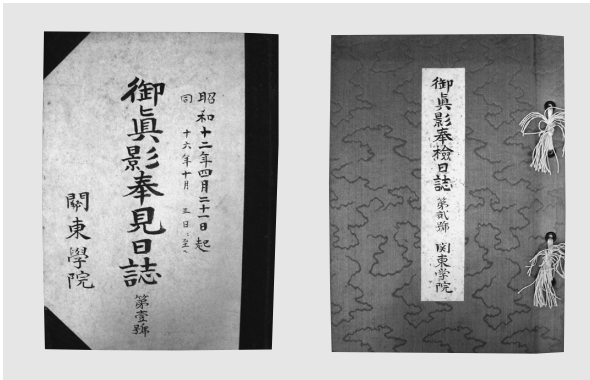
戦災にあった建物 ～中学本館～

横浜大空襲のあった1945（昭和20）年5月29日は中学部1年生だけ学院にいた。中学部1年生以外は通年勤労働員のため不在だった。

木造の建物は焼夷弾による爆撃で焼け落ち、中学本館も類焼しそうだったが、坂田院長が生徒を指揮し、顔面に火傷を負いながらも必死に消火に努め、難を免れた。しかし、建物の外壁は熱のためにはげくずれ、窓の鉄の枠も焼けてゆがみ、厚い金網入りのガラスには、無数のヒビ割れが生じた。

焼け残った中学本館では中学部と航空工業専門学校と横浜大空襲で全焼した捜真女学校の三部授業を行った。（2・7）

◆展示資料



御真影奉見日誌

終戦まで教育勅語と天皇・皇后の写真である御真影は、国家主義的教育の象徴であった。

御真影は神聖なものとされ、奉安所を設けて安置しなければならなかった。関東学院は1937（昭和12）年1月に御真影奉安所を設け、4月21日に坂田院長等が神奈川県庁に受け取りに行った。学内では、中学部通路に整列してこれを迎えた。奉安所にはこのほか「教育勅語謄本」等多くの勅書が収められていた。これを守るための奉護班を設け、また、坂田院長が定期的に点検していた。『御真影奉見日誌』はその保管の記録である。

坂田院長は著書『恩寵の生涯』の中で「御真影を奉護することは、天皇陛下を奉護すると殆ど同様に考えさせられた」、「人間の避難は御写真のあとであった」と当時の様子を振り返っている。（7・14）

坂田記念館所蔵。

・第壹冊…272×200（mm）、第貳冊…275×200（mm）



御親閲拝受記念写真帖

1939（昭和14）年5月22日、「陸軍現役将校配属令」公布15年記念に天皇の拝謁が宮城で行われ、全国の中・高専・大学の代表者が動員された時の写真集。

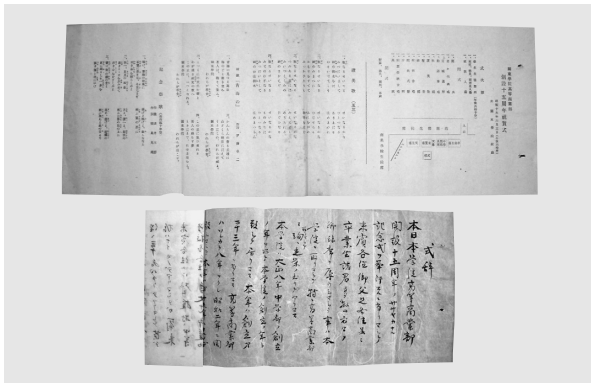
高等商業部から、白山部長、配属将校竹下大佐、引率教員として澤野教授他2名が生徒10名と共に参列した。

中学部からは、坂田院長、配属将校矢崎少尉、引率教員として清水教頭他1名が生徒10名と共に参列した。

当日は学内でも「宮城遙拝及び黙禱」「伊勢山神宮に参拝」を行った。（6・14）

坂田記念館所蔵。

・225×310（mm）



高等商業部創設15周年祝賀式次第・坂田院長式辞

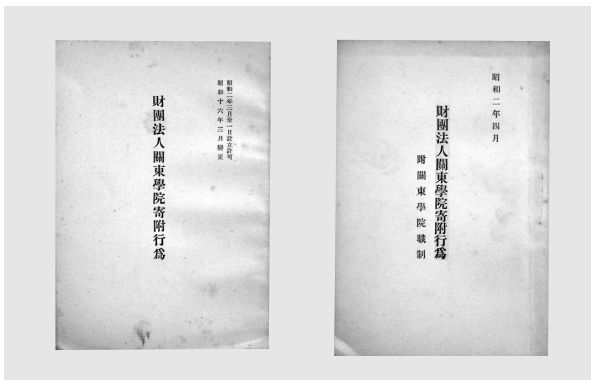
1941（昭和16）年6月3日に高等商業部は創設15周年を迎え、記念式典を行った。戦時中であり、式典は簡素なものであった。

坂田院長は式辞で、設立時の入学者は30名しかいなかったが、現在の学生数は約500名で、更に定員増が認可され2年後には600名になる、と高等商業部が発展していることに感謝している。

そして、アメリカと戦争中でありながら、「本学院が創立以来米国の同じ派の教会より多大の援助を受けましたことは真に感謝に耐え得ないことであります。」と設立時に受けた援助に対して感謝している。

中学校高等学校所蔵。

・式次第…158×540（mm）



戦時下の「寄附行為」の変化

戦時下、キリスト教主義学校に対する国家の圧力で、建学の精神の拠り所である「寄附行為」を改正し、“キリスト教主義”を後退しなければ学校の存続が図れない状況に追い込まれた。

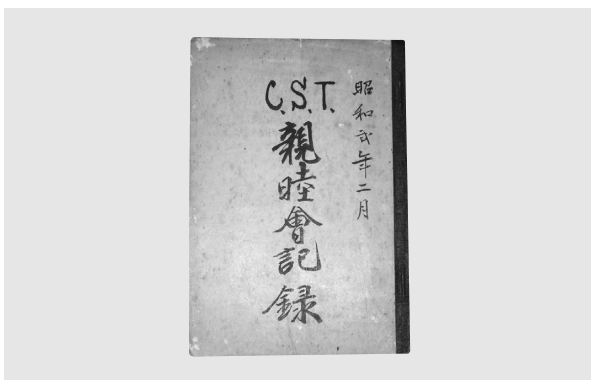
1927（昭和2）年に財団法人関東学院を組織した際の『財団法人関東学院寄附行為』には「基督教主義ニ基ク教育事業ヲ経営スルヲ以テ本財団ノ目的トス。」とあり、キリスト教教育を鮮明に打ち出していた。

しかし、1941（昭和16）年3月改訂の『財団法人関東学院寄附行為』では「教育勅語ノ聖旨ヲ奉体シ基督教主義ニ基ク教育事業ヲ経営スルヲ以テ本財団ノ目的トス」となり、「基督教主義ニ基ク教育」の前に「教育勅語ノ聖旨ヲ奉体シ」を入れざるを得なくなった。(17)

中学校高等学校所蔵。

・昭和2年版…188×126（mm），11頁

・昭和16年版…188×126（mm），7頁

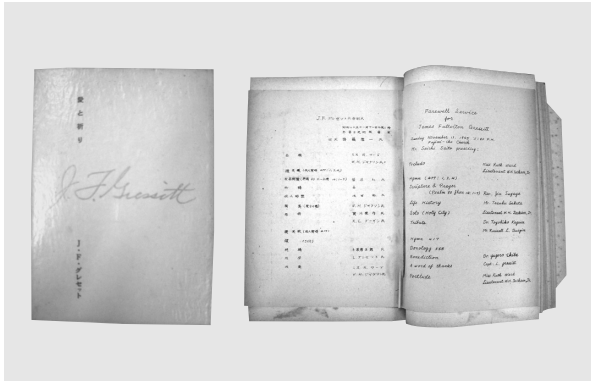


基督教学校教師親睦会記録

横浜市内の5つのキリスト教主義学校（関東学院、英和女学院、共立女学校、フェリス女学校、捜真女学校）からなる親睦会の昭和初期の議事録。

戦時中、神奈川県当局から、各校の学則にある「本校はキリスト教の精神を以て教育する」の項を削除するよう要望があったが、この親睦会の5校の校長が団結して、神奈川県当局と会見し、建学の精神を守りぬいた。(7)

・234×160（mm）



グレスセット『愛と祈り』と告別式順序

『愛と祈り』：日米開戦日の1941（昭和16）年12月8日から、抑留される1942（昭和17）年9月15日まで祈りの形式で書かれた日記。

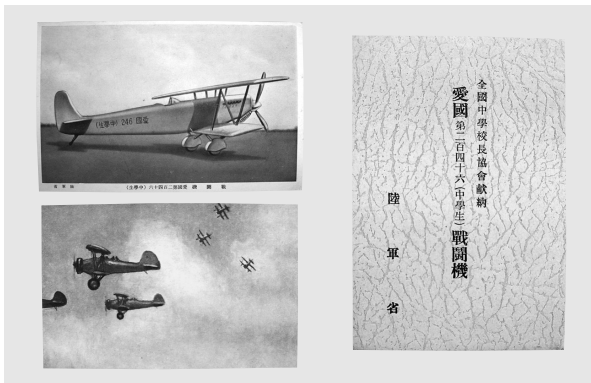
帰国勧告を退け、家族と別れてひとり日本に残り、東京抑留所での不自由な生活のなかで、神に仕える宣教師として、平和のため、関東学院のための祈りが綴られている。

グレスセット氏告別式順序：グレスセットは戦後、栄養失調で衰弱している体で、日本のキリスト教の指導的立場にあった賀川豊彦らと共に連合国最高司令官のマッカーサー元帥を訪ね、真に日本を正しく理解し、その処置にあやまりのないようにと働きかけたという。帰国直前の1945（昭和20）年11月5日に召天した。告別式は11月11日、東京の富士見町教会で行われ、関東学院の生徒代表28名が参加した。

（2・12）

グレスセット氏告別式順序は中学校高等学校所蔵。

・『愛と祈り』…185×132（mm）、107頁、石原栄義訳



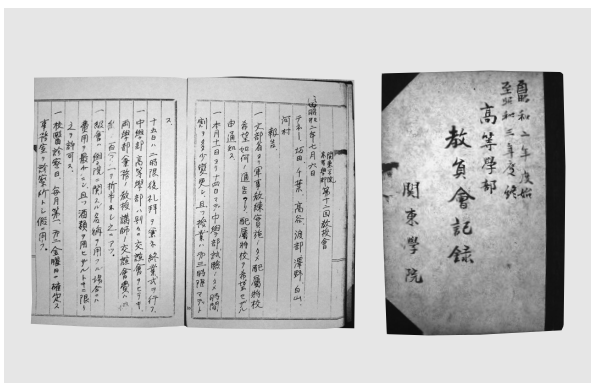
献納した飛行機

戦争が激しくなり、圧倒的なアメリカ空軍に押されて、軍用機が不足し、こうした時の動きを反映して、軍用機献納運動が盛んになり、いろいろな団体が競って飛行機を献納した。

1943（昭和18）年12月9日の教務日誌を見ると、飛行機献納のために生徒1名に1円の割り当てがなされている。

「愛国第246号戦闘機」（機体名：中学生）は全国中学校長協会が全国の中学に募金を呼びかけ、陸軍に献納したものである。（11）

・葉書…90×140（mm）



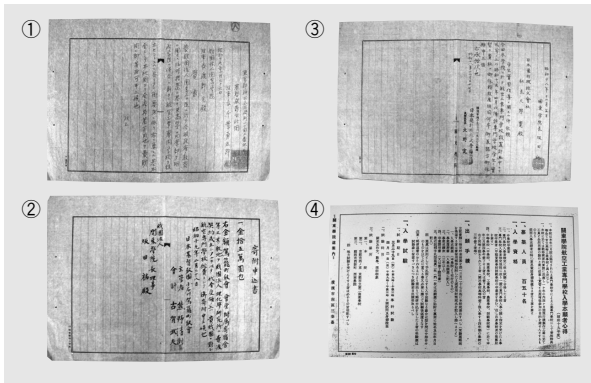
高等学部教員会記録

1925（大正14）年、「配属現役将校学校配属令」が公布されて、中学校以上は将校が配属され教練が課せられた。私立学校は申請制であったが、教練に合格すると徴兵期間の短縮などの特典があった。

高等学部の1927（昭和2）年7月6日の教員会記録に「文部省ヨリ軍事教練実施ノタメ配属将校希望如何ノ通告アリ、配属将校ヲ希望セザル由通知ス。」とあり、高等学部では1937（昭和12）年7月まで配属将校を受け入れなかった。

（17）

・234×160（mm）

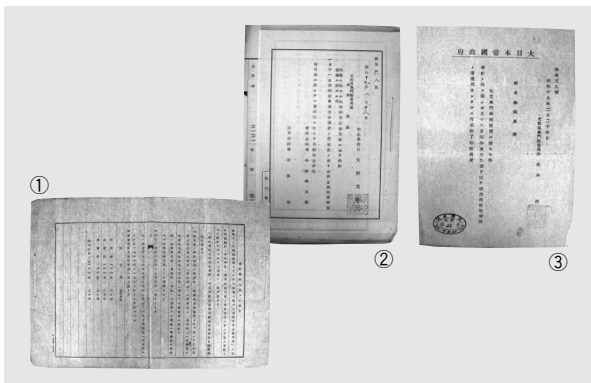


関東学院航空工業専門学校の設立

- ① 基督教新生社団からの寄附に関する「覚書」
- ② 小石川駕籠町教会からの「寄附申込書」
- ③ 学生実習指導ニ関スル件 依頼（日本飛行機株式会社宛）
- ④ 関東学院航空工業専門学校入学志願者心得

1943（昭和18）年10月に閣議決定された「教育ニ関スル戦時非常措置方策」により、関東学院は理工科系専門学校に転ずるよう勧告を受けた。転換するためには、施設面で莫大な費用が必要であり、そのための費用として、関東学院と関連団体の基督教新生社団から30万円、小石川駕籠町教会からは土地を売った代金15万円が寄付され、その他同窓会による募金活動により設立にこぎつけた。

高等商業部から航空工業専門学校に転換することは、教授陣、設備等で非常な労苦を伴った。戦時下の乏しい物資のなか最低限の設備を整え、横浜市杉田にある日本飛行機株式会社を実習工場とし、毎年生徒50名の実習を依頼する等して、1944（昭和19）年4月に発足した。（9）



関東学院高等商業部が明治学院に統合

- ① 学校統合ニ関スル申合（明治学院・青山学院・関東学院）
- ② 教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ基ク学校整備ニ関スル件（昭和19年1月18日付 文部省専門教育局長宛）
- ③ 私立専門学校整備ニ関スル件（昭和19年2月24日付 文部省専門教育局長より）

戦局が激化するとともに、文系学部が軽視されるようになった。1943（昭和18）年10月の閣議決定事項「教育ニ関スル戦時非常措置方策」に基づき、高等専門学校に与えられていた徴兵猶予は理工系や教員養成以外は停止された。また、文系専門学校の定員の縮小、統合が図られた。

関東学院高等商業部も青山学院高等商業部・文学部と共に明治学院に統合するよう、また、関東学院は工業専門学校に転ずるよう文部省から勧告を受けた。しかし、工業専門学校でやっていく見通しがたなかったためそのまま残置することと、せめて在校生が卒業するまでは猶予して欲しいということをも文部省に陳情したが国策のためという理由で拒けられた。このため、関東学院高等商業部から1年生4名、2年生151名が明治学院専門学校へ転入した。3年生197名は、関東学院高等商業部卒業生として修学年限が6ヶ月繰り上げられ、1944（昭和19）年9月に卒業した。（9）

●戦時関連年表（記載事項は『関東学院百年史』、『通報録』、『経理委員会記録』等に拠る。）

- | | |
|---|--|
| <p>1925年 「陸軍現役将校配属令」が公布され、中学以上の学校では現役将校による訓練を実施。私立校は申請制（4・13）、中学に将校が教官として配属（7・）。</p> <p>1927年 文部省より軍事教練実施のため配属将校の派遣の問い合わせあり、高等学部教授会は受け入れないと回答（7・6）。</p> <p>1928年 関東学院セツルメント活動開始（3・）。</p> <p>1931年 満州事変始まる（9・18）。</p> <p>1936年 坂田祐が学院長に就任（3・）。</p> <p>1937年 御真影奉安所及び奉掲所完成（1・22）。神学部の学生を青山学院神学部に委託し、神学部を閉鎖（3・）。関東学院セツルメント閉鎖（3・）。御真影及び教育勅語謄本を奉体し、中学部本館塔に安置（4・23）。高商部に現役将校配属（8・）。高商部秋季野外教練を富士裾野で4日間実施（10・）。クリスマス礼拝（12・23）。</p> <p>1938年 国家総動員法公布（4・1）。文部省から「集团的勤労作業運動実施ニ関スル件」の通牒により中学部、高商部ともに勤労動員が始まる（6・9）。</p> <p>1939年 テンネー記念講堂献堂式（3・3）。文部省が勤労作業の漸次恒久化と準正課の扱いを指示（3・31）。コベルは日本から強制退去を命じられ、フィリピン・セントラルカレッジに転任（6・7）。生徒夏季集団勤労奉仕（7・）。学院創立20周年記念式典を挙（11・18）。</p> <p>1941年 文部省は各学校に全校組織の学校報国団の編成を訓令。学友会を高商部報国団、中学部報国団と改称（8・）。高</p> | <p>商部は就学年限を短縮するという指示が発令され、3ヶ月短縮して、12月に繰り上げ卒業（12・）。米英両国に宣戦布告（12・8）。</p> <p>1942年 高等商業部は就学年限を6ヶ月間短縮して卒業（9・）。</p> <p>1943年 英語学校の授業を停止（3・13）。英語学校の解散式（12・13）。コベル夫妻がフィリピンで日本兵に惨殺される（12・19）。</p> <p>1944年 高等商業部は「教育ニ関スル戦時非常措置方策」に基づき青山学院高等商業部、文学部と共に明治学院に統合（3・31）。高等商業部の廃止により航空工業専門学校を設立。校長に白山源三郎就任（4・1）。三崎寄宿舍を海軍による強制買い上げで手放す（4・）。中学部木造校舎にビクター工場が疎開して、防空通信機材の製作開始（12・25）。</p> <p>1945年 「中学校令」が改正され就学年限が1年短縮され、中学部4年生と5年生が同時に卒業（3・）。体育館は食糧営団の倉庫に使用され、米俵が積み込まれる（3・31）。横浜大空襲により、テンネー記念講堂をはじめ木造校舎のすべてが灰燼になり、学院施設の4分の3を失う（5・29）。捜真女学校校舎焼失のため関東学院で捜真女学校、中等部、航空工業専門学校による3部授業（6・）。ポツダム宣言受諾日本降伏（8・15）。航空工業専門学校を工業専門高校に転換（10・19）。日米の戦争回避を願って日本に残ったグレセット、栄養失調のため東京で病死（11・1）。六浦にある海軍の航空技術廠工員養成所の施設の使用が許可される（12・）。</p> |
|---|--|

『三十年の歩み 関東学院大学』

発行 関東学院大学 1980(昭和55)年

本書の奥付けには「関東学院大学 三十年の歩み」となっている。表紙タイトルと整合性がない。しかし「三十年の歩み」編集委員会が本書の編集に当たったので、ことさらに「三十年」を前面に出したのであろうか。今から言えば、三十年の歴史は「歴史」というほどではない。英文学者であられた柳生直行元学院長が、三十年についてこう述懐する。

「三十年といえば英語の one generation に当たります。生まれた子供が成長した大人になって次の世代を生む(generate)まで三十年かかる、という意味でしょう。今年わが関東学院は満三十歳の誕生日を迎え、完全に成熟した大人になりました。」(4頁)

「たかが三十年、されど三十年」。実は感慨深い三十年なのである。

最後に加えられている「資料・年表」では、昭和24(1949)年「学制改革にともない関東学院大学を設立。経済学部経済学科、工学部機械工学科、建築科を設置」とあるところは、ゴシック体の文字で印字されている。それから1979年の間は、関東学院大学の存在を世に知らせ、持続するための絶えざる闘いであった。特に1968年からの十年は、大学紛争の激しい嵐に翻弄され「重症校」の苦渋を味わっている。(これについては別の機会に資料を分析・紹介しなければならない。)これは最悪の混乱を一応克服したことを示す出版物である。本書が時代を区切る働きをしたのである。

目次によれば、「巻頭言」に四人の名前がある。しかし一人の方は英文で関東学院大学の歴史と現況を書いて寄稿しておられる。しかもそれは他の三人から離されて掲載されている。その原稿は内容から判断して、「巻頭言」の分類には入らないものなのだろうか。(であれば、目次と掲載場所を工夫すべきである。)

巻頭言の三人は大学紛争の嵐を潜ったものとして、そこで提起された問題を内面化してとらえておられる。

「三分の一世紀に亘る歴史の中で多くの先覚者たち

は大学を去り、多くの先輩職員も年々新陳代謝し、かつての建物は取り壊され、大学は休みなく変容しつづけた中で、建学の精神だけはいつまでも脈々と受け継がれていかなければならない。・・・建学の精神を内実化しつつ、明日の八十年代に向けて、関東学院大学の積極的な発展のためにも、我々はこの三十年間を一つの節目とし、本学がユニークな教育と学風を持つ大学として名実ともに、その評価が高まることを期待して望むものであります。」(当時の学長 高橋 賞)

「多難な三十年の歩みを全うし、次のジェネレーションへの第一歩をふみ出そうとしている今、われわれは過去の歴史を顧みつつ、将来の展望を真剣に考えようとしているわけですが、その際、何よりも大切なことは、生みの親の心、すなわち、建学の精神を改めて見直し、本学の存在の意義はそこにしかないのだということ、はっきり再確認することです。」(当時の学院長 柳生直行)

「この『歩み』には、学院の創業育成の業に参与した方々、また、遺業を継承して、その後の発展と成長に尽力寄与された諸先輩の、そのときどきに築き上げたどり歩んだ後代に伝え残すべきさまざまな足跡が記されている。・・・新たに本学の建学の理念と使命を時代と社会に向かって発揚することを課せられている私たちにとって、『歩み』の裨益するところきわめて大である。『歩み』が関東学院大学の未来を切り開く大きな鍵となることを祈ってやまない。」(当時の理事長 高野利治)



目次は次の通りである。

- 第一章 創設のころ 座談会
- 第二章 学部の歴史と現況
- 第三章 諸機関とその活動
- 第四章 現在と未来 座談会
- 第五章 学院内各校
- 第六章 諸団体
- 資料・年表

紙面の都合もあり、上記の各章について取り上げることはできない。関心のある方は、とくに第一章「創設のころ」と第四章「現在と未来」の座談会を読みたい。これらは、今日の私たちにとっても学ぶことや、示唆に富んでいる発言が多い。

(経済学部教授・学院宗教主任 高野 進)

参考資料一覧

1. 小アルバム『三春園及箱根報国寮 記念写真』(1938年頃) *坂田記念館所蔵
2. 『この丘に立って 一関東学院中学校高等学校80年史』 関東学院中学校高等学校 (1999年11月6日)
3. 『學報 KANTO GAKUIN HIGH SCHOOL JOURNAL』 創刊号 関東学院中学部 (1947年12月20日)
4. 『野外教練其他 昭和15年5月以降』(綴) 関東学院中学部 (1940年5月) *中高所蔵
5. 『通報録 自昭和十年九月 至昭和十二年十一月』 関東学院 (1935年9月)
6. 『通報録 自昭和十二年十一月 至昭和十四年十一月』 関東学院 (1937年11月)
7. 『新編 恩龍の生涯』 坂田祐著 待農堂 (1976年8月10日)
8. 『関東学院小史』 関東学院 (1954年10月23日)
9. 『関東学院百年史』 関東学院 (1984年10月6日)
10. 『関東学院大学経済学部30年史』 関東学院大学経済学部 (1980年3月21日)
11. 『教務日誌 自昭和十七年七月十日』 関東学院中学部 (1942年7月10日) *中高所蔵
12. 『教務日誌 昭和二十年六月十五日起』(関東学院中学部?) (1945年6月15日) *中高所蔵
13. 『関東学院学報』第12号、第18号～第20号 関東学院 (1996年9月2日～)
14. 『経理委員会記録 第参歸 自昭和十二年一月』 関東学院 (1937年1月)
15. 『関東学院と横浜大空襲』 関東学院撤機会 (2005年12月8日)
16. 『関東学院セツルメント』 関東学院 (発行日不明) *坂田記念館所蔵
17. 『立教大学の歴史』 立教大学 (2007年1月25日)
18. 『写真でみる横浜大空襲』 横浜市 (1995年5月29日) *大学図書館所蔵

□「關東學院大講堂設計圖繪葉書」(2枚組)

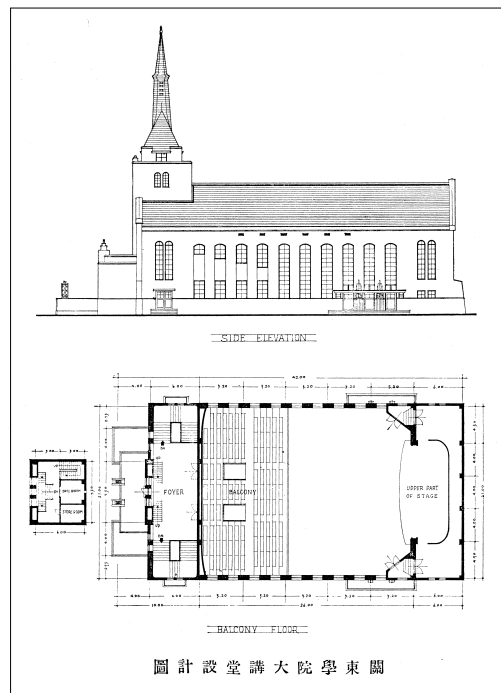


「關東學院大講堂」はテンネー記念講堂のことである。テンネー記念講堂の当初予定していた姿をこの繪葉書で見ることができる。実際には鉄筋コンクリート造ではなく木造になり、塔の部分は省略された。(表紙頁参照)

『経理委員会記録』①には、この講堂に関する記録がいくつか残っており、テンネー博士が召天した翌月の1936(昭和11)年2月7日には「テンネー名誉院長記念事業計画」について協議され、「記念事業費 金拾壹萬ヲ募集スルコト」「金七万圓ヲ以テ記念講堂ヲ建設」とある。また、同年9月16日には「テンネー記念大講堂ノ計画出来(以下略)」とあり、その後、募金運動を開始した。この頃に繪葉書が作成されたことが推測できる。

なお、1938(昭和13)年3月7日の記録には、鉄筋コンクリート造から木造への変更に踏み切ったことが記されていて、この変更経緯や募金状況等が記載された「講堂募金趣意書別紙ノ通り全校生徒父兄ニ発送スルコト」とある。

その後、上棟式挙行前夜に大暴風で倒壊してしまったことや、献堂式の時期を幾度か延期したこと等が記録に残っており、様々な困難を経てテンネー記念講堂がようやく完成したことがわかる。



圖計設堂講大院學東關

①第2号(昭和9年3月~昭和11年12月)、第3号(昭和12年1月~)

資料・情報提供のお願い

学院史資料室は学院に関する資料の収集をしています。

各学校、各部署等で発行されました刊行物は一部、学院史資料室にご寄贈くださいますようお願いいたします。また、各所で作成されたのち、既に保存期間を超えたか、不要になっている過去の書類、機器・備品、写真などにつきましても、情報を提供していただけますようお願いいたします。



関東学院 校訓

編集後記

◆学院の歴史は、多くの試練を乗り越えて今日に至っております。◇坂田学院長は中学関東学院第1回卒業式の告辞で、「学院から平和のチャンピオンが出づることを止まぬ次第である」と訴えた願いもむなしく、戦時下、学院は軍事教練、勤労動員と、戦争に協力せざるをえなくなりました。しかし、学院には、コベル先生やグレスセット先生のように平和を追求し続けた教師がいました。◇坂田学院長は、戦時下の最も厳しい試練は神奈川県を通じて、「キリスト教主義による教育」を学則から削除するよう圧力を受けたことだと語っています。坂田学院長は市内のキリスト教主義学校の指導者と共にこれを守りぬきました。(三浦) ◆横浜大空襲での焼失を免れた日誌や議事録等の記録は、戦時下当時の状況を淡々とわたしたちに伝えてくれます。先人が遺したこれらの記録類を後日「資料集」として纏められれば…と思います。(菊池)

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第11号

発行日 2007(平成19)年10月1日

発行人 関東学院 学院長 森島牧人

編集 関東学院 学院史資料室

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL. 045-786-7066 FAX. 045-786-2932

環境に配慮して



古紙配合率100%再生紙を使用しています
2007.10.1.2000